



アメリカ浄土真宗に学ぶ

Takashi Miyaji さんへのインタビュー

第1回

本誌では、本年4月号より寺院活動支援部国際伝道担当による「海外の浄土真宗事情」を掲載しています。

本願寺派総合研究所でも、所掌事項に基づき国際伝道に関する情報収集を行っています。今回から数回にわたり、総合研究所臨時職員で、博士号取得のためアメリカから来日中の宮地崇さんへのインタビュー内容を報告します。

日本はグローバル化の進展などにより、異なる文化圏で生まれ育った人ひととの交流がますます増加していきます。そこでは、当然多様な価値観や倫理観がもたらされていきます。そのような中で、浄土真宗には今後どのような課題が起ってくるのでしょうか。

多民族が共存する歴史を歩んできたアメリカを故郷に持つ宮地さんに、当地における浄土真宗の状況についてお話しいただき、そこから私たちの未来について考えていきたいと思います。

尚、インタビューは、藤丸智雄（総合研究所副所長）が務めます。

藤丸 まずは、宮地さんのプロフィールについて教えてください。

宮地 来日して今年で5年目になります。父親が開教使としてアメリカへ渡り、私はそのアメリカで生まれ育ちました。

現在は西本願寺に勤務しつつ、龍谷大学の研究生として博士論文に取り組んでいます。2年前に結婚もしまして、おかげ

さまで日本語の問題もほとんどなくなりました。ワイフ（妻）が熊本県出身なので、熊本弁も少しなら分かりますよ（笑）。

藤丸 大学では、どのようなご研究を？

宮地 私は大学で、「浄土真宗と倫理」に関する研究を行っています。今日はその内容や、アメリカでの私の経験を踏まえてお話しできればと思います。

欧米における真宗研究の第一人者、アルフレッド・ブルーム先生（ハワイ大学名誉教授）は、真宗の教えを平易に説き、社会と接点を結ぶことの重要性を指摘し続けてこられました。前門さまも以前、専門用語を駆使して伝道することは難しいという趣旨の発言をされたことがありますね。

確かに、私の印象としてもアメリカで仏教の専門用語は全く通じません。「他力本願」「往生浄土」「悪人正機」など、真宗教義のど真ん中をテーマに布教伝道したい僧侶の気持ちはよく分かります。しかし、全人口の5%にも満たないマイノリティの仏教は、まだまだ基盤作りをする必要があるように感じます。その際、相手が分かる言葉を紡ぎ出すことの大切

さと言うまでもなく、現実社会の倫理的課題に対して積極的に発信することもとても重要です。倫理への応答がなければ、宗教として認識すらされないという現実があります。

藤丸 現実の倫理的課題と仏教、さらに浄土真宗との関係を問うというのが、宮地さんの研究テーマということになるわけですね。

宮地 これまで真宗における倫理の問題に関する包括的な研究はなされてきませ

の歴史を振り返り、そこからの学びを通



Takashi Miyaji (宮地崇)

一九八四年アメリカ・ユタ州生まれ。二〇〇六年、カリフォルニア大学バークレー校哲学科卒業。この間、慶應義塾大学へ一年間留学。二〇一一年、IBS（米国仏教大学院）修士課程修了。二〇一三年から二〇一六年まで、龍谷大学大学院修士課程及び博士課程に在籍。現在、本願寺派総合研究所臨時職員、龍谷大学研究生の傍ら、浄土真宗聖典英語翻訳委員会で仏典翻訳などにも携わる。

して現代的課題へ応答するためのきつかけ作りをしたいと思っています。「倫理」はアメリカで布教伝道する上で、一つの重要なキーワードだと思えます。宗教を持たない人たちとも、倫理を通して対話も可能になるでしょう。そこにこそ、伝道の可能性が拓けてくると考えています。

藤丸 西洋の場合、「倫理」に関してアリステレスから始まり、キリスト教はそれを土台に倫理的な思索の蓄積をしてきました。宮地さんが考える仏教・真宗の倫理とは何ですか？

宮地 真宗において倫理を考える場合、大前提としてそれが「悟りを得るためのものではない」ということを押さえておく必要があるでしょう。自分の不完全さ、限界を把握した上で、それでも教えを頼りに実践するのが浄土真宗の倫理の基本的な立場ではないでしょうか。自己の限界を踏まえたところから起るのが倫理だ

と考えています。

藤丸 阿弥陀如来の救済の中に生きていくわれわれ念仏者は、阿弥陀如来のように広大な慈しきをもつて他者にかかわることはできませんが、不可能であっても阿弥陀如来を仰いだ生き方をしたい、という倫理観はありうるわけです。

しかし問題は、倫理をどこまで具体化できるかということではないでしょうか。行動規範を導くにはまず倫理上の理念・原理が必要です。つまり、「何が善か」が明らかにならないといけません。しかし、それだけでも十分ではありません。んよね。その原理を、どう具体的な事象に結び付けていくかが問われます。そこを問うて、初めて社会に響く倫理として成立していくのだと思います。ただそのことは、とても難しいことです。なぜなら、具体的な事柄への判断となると、理念から直線的に1対1の対応で答えが出るわけではないですから。そうした、応用倫理の難しさがあると思うのですが、

アメリカにおいて宗教は、具体的な倫理的課題に対して、積極的に発言していくのでしょうか？

宮地 例えば、キリスト教では、同性愛に対して聖書に基づいた否定的な意見が多く出されています。

少し話は変わりますが、真宗では江戸時代に「小児往生」のテーマが盛んに取り上げられました。これは当時、社会で問題となっていたからこそ議論されたのでしょうか。

同じように、現在起きている社会問題に私たちも応答する必要があります。そういう社会が抱える具体的な問題について、何か発信しなければ、宗教として認めてもらえないのがアメリカの文化です。そのために、私たちは他者と対話することから始めなければいけません。100年後、20年後に考えや意見が変わることもありうるでしょう。訂正する必要があることもあるでしょう。それでも、今ある情報を必死にかき集めて、自己の

宗教的信念をたよりに発言し、他宗教と対話しなければいけません。私自身、容易に答えが導き出せない問題に対して、

確固たる自信を持って発言できない以上、常に不安がつきまといまいます。でも、宗教者として生きていくことを決めた以上、「発言する」という意志を強く持っています。

議論が始まると、アメリカではだいたいの喧嘩になります(笑)。大学のころ、哲学を学んでいましたが、教室の中で異なる宗教どうしがしばしば喧嘩していました(笑)。

藤丸 アメリカの浄土真宗は、どのように対応されているのでしょうか？

宮地 今、アメリカの開教使さんたちは、実際に社会問題について検討する場を持ち、みんなで考えて積極的に発信しようと動いています。他宗教ともっと対話し、そして問題を抱える当事者たちとも対話しつつ、倫理を導き出さなければならな

いと考え、動いています。

藤丸 これまで総合研究所では、小林正弥先生(千葉大学大学院教授)のご指導を仰ぎながら、「対話」への学びを深めてきました。そもそもギリシャで生まれた「倫理」は、ソクラテスやプラトンの「対話」という手法が重要な役割を果たしてきたわけですね。また、仏教でもアビダルマに見られるような教義的な発展は、まさしく諸学派間の教義上の開かれた対話によってもたらされました。しかし、現代の日本の状況を見ると、異なる立場の人が対話する光景が少ないように感じられます。その背景には、60年代や70年代の学生運動の一種の挫折があるとも指摘されますが、アメリカではいかがでしょうか？

宮地 やはり、アメリカにも同じ傾向があります。60年代や70年代、アメリカでもベトナム戦争などをめぐって学生運動が起こり、西海岸のサンフランシスコや

IBS(米国仏教大学院)があるパークレーでは若者たちが盛んに声を挙げました。それに比べると、今は議論の盛り上がりやや低下している印象を受けますね。

藤丸 少し話を元に戻しましょう。宮地さんは、具体的な歴史的な事象を追って、その時々の真宗から出された見解やメッセージを整理し、真宗の倫理観について研究をしたいとおっしゃいました。それは見方を変えたと、そういう倫理的な課題になるような事象が発生すれば、自ずと倫理的課題が検討され、発言せざるを得ない状況になるということでしょうか。

宮地 難しい問いですが、半分そうだと思います。問題は、倫理的な課題となるような事象が発生しても、検討されないケースです。すなわち、社会問題が起こったときに、「対応しない」という判断が下される場合です。このような光景が

しばしば見られます。無視する状況が起こることがあります。つまり、立場をとらないという立場をとるわけです。こういう「何もしない」という行動が、一体どこから生まれているのか、ということも分析する必要があると思っています。

しかし、先ほども申し上げたように、アメリカではそれは通用しません。それでは宗教とは認められないし、人びとは真宗から離れてしまいます。他の宗教と肩を並べたいのであれば、「発言する」ということは最低条件です。究極的には間違ってもいいのです。間違つたなら、反省して改めればいいのです。できる限りの勉強と対話を積み重ねて、発言すべきことを、発言すべき時期に、発言すべき、というのがアメリカのあり方です。「発言しない」という判断は、社会問題の中で苦しむ当事者たちへ「無視された」という絶望をもたらし、すでにご縁のある念仏者を含むその他の人びとにも「真宗は人生への問いに応答できないものだ」という印象をもたらします。それは

うし、必要とされていくと思います。議論や対話を通して論を鍛え上げていくことで、発信していくことが可能になります。

繰り返しますが、宗教を持たない人たちとも、倫理を通して対話が可能になり、ご縁が広がり、伝道の可能性も拓けてくると考えています。

藤丸 ありがとうございます。今日のお話のポイントは、倫理的課題について、まずは情報を集め、「対話」の場を作っていくところから始めるべきということですね。アメリカと日本の違いは、もしかすると社会にある問題の多さや質の違いではなく、「対話」し、互いに意見を表明できる状況があり、「対話」することが社会の大切な価値になっていることにあるのかも知れないと感じました。

今回のお話から、「聴くこと」や「対話すること」の大切さが浮かび上がってきました。宗教は「伝える」ことを重視

結果として、真宗の信頼と宗教としての価値を失うことに繋がるのです。

藤丸 アメリカの場合は宗教者の発言が最初から要求されているわけですね。しかし、日本ではそもそも社会問題に対して僧侶が発言すべきでないと考えている方もいます。個人の経験ですが、しばしば宗教は心のこと、人間の内面のことだけにかかわるべきだという主張に出会います。『本願寺白熱教室』（法蔵館、二〇一五年）でも紹介しましたが、社会的な問題について発言すべきかどうかについては、僧侶の中にも様々な意見がありましたし、島蘭進先生（東京大学名誉教授）も本書の中で、この点について考察を加えていらっしゃいます。宗教者に対する期待があり、社会的発言を求められるアメリカと、そうでない日本。この状況の違いをどう思われますか？

宮地 その違いは確かに感じますが、それは社会の問題というより、日本の宗教しがちですが、その前に「聴く」「対話」を置いて考えるべきではないか、という示唆としても受け止めさせていただきました。

宮地さんは、総合研究所発刊の『季刊せいてん』にも原稿をご執筆いただいています。その内容は、英文翻訳のものですが、次回も、「アメリカ浄土真宗」をテーマに、引き続き、お話をうかがいたいと思います。

（本願寺派総合研究所 教団総合研究室）

者の問題ではないでしょうか。宗教者に対する肯定的、批判的、どんな意見でも構いません。社会に生きる人たちと対話し、宗教や社会のことをどう思っているのか、その意見を聞く場をもっと設定することからしか、宗教者の必要性も、宗教に対する信頼性も高まらないのではないのでしょうか。

最初にも触れましたが、アメリカは非常に多様な社会ですから、多様な倫理観が衝突せざるを得ません。

今、環境問題やLGBT、人種にまつわる問題などは、アメリカも情報を欲しています。きっと日本にもそういう問題があるはずですよ。特に近い将来、人種差別の問題は、より過激になってくるでしょう。多様な人種が入ってくる中で、倫理問題を発信しないという選択肢は、もはやありえなくなります。それが必ず問われるようになってきます。重要なことは、自分のほうから発信していくことです。価値あるものを自信を持って言うことで、宗教者はもっと認められるでしょう。